

研究課題別事後評価結果

〈2017年度採択研究課題（コロナ延長課題）〉

1. 研究課題名： セルフリハビリテーションを促進するシステム基盤構築

2. 個人研究者名

杉浦 裕太（慶應義塾大学理工学部 准教授）

3. 事後評価結果

高齢化に伴う整形外科疾患の患者数の増加により、病院からリハビリ患者が溢れてしまう「リハビリ難民」が社会問題となっている。この課題を打開するために、本研究では IoT 技術を用いて、病院以外での地域包括ケアシステムや生活環境でリハビリ実施を促すシステム基盤の構築を目指した。特に、整形外科疾患の中でも上肢の疾患である手根管症候群と橈骨遠位端骨折の運動機能回復をターゲットとした。

まずは、実問題から研究を出発しており、社会問題に貢献している点が評価できる。具体的には、手根管症候群等の患者推定や早期発見につながるタブレットやスマートフォンのアプリケーションの開発に成功した。このように、実社会に配布可能なレベルでの設計開発を行い社会実装まで行われている点が本研究の特徴である。医者とのコラボレーションをしっかりとされ着実に結果を出されている点が高く評価できる。

今後は、情報、インタラクション研究の医療へのかかわりがますます重要になるため、この分野を牽引して行かれる研究者を目指してほしい。

（2021年9月追記）

本課題では、新型コロナウイルスの影響を受け、医療データセットの蓄積が遅延し、結果として研究成果の公開が遅れた。そのため、6ヶ月間期間を延長し、研究成果をまとめるとともに、公開に向けたプレスリリースの準備と発表を進めた。その反響もあり、多数のメディアより照会を受け、その対応作業やシステムの社会実装を中心に研究を進めた。

その結果、2021年5月と6月にプレス発表関連2件を実施し、研究成果の社会実装への橋渡しとなった点は高く評価できる。今回の延長により、社会での活用に向けた展開をより一層後押しする成果が得られた点も評価できる。